



Title	会話の発達を支えるもの
Author(s)	仲, 真紀子
Description	10.
Relation	読む書く話すの発達心理学, 内田伸子編著, (放送大学教材), ISBN: 459582162X, pp.97-105
Issue Date	1994-03
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/44815
Type	book part
File Information	YKHS1994_97-105.pdf



会話の発達を支えるもの

人は生まれおちた瞬間から相互交渉をもつべく方向づけられていることを学んだ。だが適切な社会的、言語的環境になれば話しことばは育たない。どのようなはたらきかけによってことばは育つのだろうか。

1. 対人関係

●信頼関係

相互交渉を維持し、動機づけるのは信頼できる人間関係である。自分が意図することが相手に伝えられるという信頼関係があって、はじめて意味のある会話が成立する。信頼関係が築けないような発話—ことばと内容が相反するような発話、ことばだけで内容が伴わない発話—は、会話を意味のない行為にする。

例えば、「何でもお母さんに話してごらん」と言っておきながら、いざ子どもが話しかけてくると面倒くさがる母親のもとでは、子どもは話すほうがよいのか話さないほうがよいのか混乱してしまう。ことばとことばに伴う態度が逆の情報になっており、2重の拘束(話せ対話すな)が生じるからである。これはダブルバインディングという、コミュニケーションの障害の原因となりうる。

以下は相談室で見られた情景である¹⁾。

知能指数を知りたいという母親に連れられて相談室を訪れたR児は、4歳8カ月の男児である。身体は大きく、動きも活発、口も達者で、母親は、R児が高い知能指数をもっていると期待している様子だった。だが知能指数を測定したところ、まったく平均的であり、母親は

がっかりしてしまう。期待を裏切られた母親との面接の最中、Rが待合室に置いてある紐のついた木製の犬を引っぱって部屋に入ってきた。室内を歩き回っているうちに紐がいすの脚にからまる。「ママ、ママ、とって」と母親の肩をたたきRに対し、母親は「自分で工夫しなさい」と一言。教育的な指示を受けたRは素直に「工夫しなくっちゃ、工夫しなくっちゃ」と言いながら、ただ紐を引っぱるだけ。だが力を入れてもとれるはずもなく、イライラしはじめたRに、母親は「ただ引っぱってもだめでしょう。ママは考えてごらんなさいと言っているのよ」……。

ことばづら(「工夫しなさい」)だけが伝達され、内容(「どうやって工夫するのか」)が伝わっていない例である。

2. 会話のスタイル

●発話の特徴

子どもに対する大人の発話を観察すると、大人同士の発話に比べ、以下のような特徴がみられる²⁾。

- 大人に向けられる発話よりもはるかに単純である。
- 大人に向けられる発話よりもはるかに文法にかなっている。
- 高度に冗長な形式をとる。
- 語句や文全体を反復し、先行の文や語をパラフレーズする。
- 限定された文型を頻繁に、かつ反復使用する。
- 子ども自身の言語能力水準によく適合している。

大人は意識して行っているわけではないが、このような発話スタイルが、子どもの言語獲得を促進する。

●会話の非対称性

大人による援助は、発話の量にもあらわれる。母親は子どもの短い発

話を助け、補い、引き延ばす。マルティネ (Martinez, M. A.)³⁾が観察した2歳児とその母親の会話を見てみよう(表10-1a)。母親が話す量の方が圧倒的に多い。このような会話を非対称的な会話という。マルティネはさらに母親の発話を「反応」,「マンド(要求)」,「反応とマンド(これをターンアバウトと呼ぶ)」,「無関係」の4つに分けた。そして特にターンアバウトは重要であるとして、3レベル6カテゴリに分類している(表10-1b)。マルティネの観察では、母親は子の3倍のターンアバウトを行い、その中でも特にフォローアップが多かったという。

表10-1a 非対称的な会話

子:(車から犬を出して、母に見せる)	<1>
母:そのワンワン、どこに置くの?	<2>
子:ここ(とガス台の上におく)	<3>
母:そこ?やいちゃうの?	<4>
子:(うなづく)	<5>
母:(ガス台から犬をとって)ねえ、そこはガス台よ	<6>
子:え?	<7>
母:(ガス台をさわって見せ)そこはごはんを作るガス台よ	<8>
子:だめ	<9>
子:(犬を掴み、見る)	<10>

表10-1b ターンアバウトの種類

ターンアバウトの種類	例
単純ターンアバウト	
(1) 非言語的	言葉はなく、動作だけ。受取り、返すなど。
(2) 二部分	単純な反応とマンドから成る。「そう(反応)、で、これは?(マンド)」,「そう(反応)、それがいいの?(マンド)」など。
中間的ターンアバウト	
(3) 明確化の要求 または繰り返し	「そこ?やいちゃうの?」<4>など。
(4) 応答マンド	子どもの「え?」<7>に対して「ごんはんをつくるガス台よ」<8>と答え(反応)、ガス台を示す(マンド)など。
高等ターンアバウト	
(5) 訂正	「そこは、ガス台よ」<6>(と子どもの発話や行動を訂正する)。
(6) フォローアップ	発話を維持しようとする明確なこころみ。(犬をとりあげた子どもに対し)「どこに置くの?」<2>など。

●外国語の習得過程に見られる会話の非対称性

会話の非対称性は大人と子どもの間にだけ見られるものではない。一般に、言語能力の高い者と低い者との会話では、高い者が低い者の発話をリードし、援助する。表10-2は日本語学校の授業風景である。来日2カ月目の留学生(日本語は来日後に始めた)に対して行われている。

表10-2 日本語の授業

-
- T: 先生がいすの上に置いたものは何だと思えますか？
T: 先生がいすの上に置いたものは何だと思えますか？(繰り返す)
S: 先生がいすの上に置いたものは宿題だと思います。
T: これは北海道へいく学生の宿題です。
S: おいた、おいた、何ですか？(「おいた」の意味がわからない)
T: 置きました。置いた、置いた。(「おいた」の原型から推測させる)
S: あー。
-

筆者の研究室では、安田⁴⁾が次のような実験を行った。留学生と日本人学生に日本語および英語(留学生の母国語)で簡単な会話をしてもらう。得意な言語で話す場合と不得意な言語で話す場合とで、相手に返す反応(フィードバック)の仕方がどう異なるかを検討するのが目的である。被験者は日本人学生が2人(A, B), 留学生が3人(X, Y, Z)で、日本人学生A, Bは、それぞれX, Y, Zの3人の留学生と会話をした。会話の後、話しやすさや話した相手の言語能力なども評定してもらった。その結果、次のようなことが見出された。

第1は、日本語で会話をするときには日本人の学生が主導的なフィードバックを、また英語で会話をするときには留学生のほうが主導的なフィードバックを行う傾向がある、ということである。表10-3は日本

語における会話である。日本人のほうが相手の発話を引き出すようなフィードバックを行っている。

第2は、相手の言語能力をどの程度とみなすかとフィードバックとは関連がありそうだ、ということである。日本語会話において、日本人BはAよりも留学生に対するフィードバックが少なかった。BはAよりも留学生の日本語能力を高く評価している。留学生に対する援助的なフィードバックが少ないのは、Bが留学生の言語能力を高く評価し、自分と同等に話せる対象と認識したためかもしれない。

表10-3 日本人と留学生の会話⁴⁾

日本人学生とマレーシア人留学生の会話（J：日本人，M：マレーシア人留学生）

<物価の高い日本で安く暮らすには>

J：1ヵ月、何万ぐらい使ってる？

M：？

J：自分でくらししてるんでしょう？

M：そうです。あの、

J：送ってもらってるの？おうちの人に？

M：あ、あたしは奨学金、もらってます。

J：ああ、そう。

M：はい。

J：それは、あの、学費とかはどうなってんの？

M：ああ、学費は、あたしは、文部省の、日本の文部省から。

J：うんうん。

M：学費とか、全部文部省が、文部省が出します。

J：ああ、じゃあ、生活費は？

M：生活費はどのくらいかかる？よくわかんない。

J：うーん、その奨学金で間にあいますか？

M：はい、間にあいます。

J：間に合う？うは一。

M：あまりかからないから、例えばね、買物とかなるべく安いところに行くから。

3. 発話の質

●精密コードと制限コード

バーンステイン(Bernstein, L. E.)は、子どもの属する社会階層がそのメンバーの言語の使用法に影響を与え、それが論理的な思考など、認知的な能力に影響を与えるという仮説を立てた。労働者階層や中流階層の母子のコミュニケーションスタイルを観察し、労働者階層では禁止や命令、詰問的な口調が多い(制限コード)のに対し、中流階層ではより説明的、抽象的な会話が多い(精密コード)ことを示し、こういった言語の違いが、認知的な能力の発達にも影響を及ぼすと考察している⁵⁾。

確かに語彙や文法の獲得には、環境の影響が大きいようである。大久保⁶⁾は、獲得語彙に差のある2人の幼児AとB(両者とも就学前、6歳)の言語環境を比較し、獲得語彙と言語環境との関連を示唆している。

A児、B児の母親に採集してもらったテープは、それぞれおよそ12時間程度であった。これらのテープに出現した全使用語数は、A児4743語、B児13723語、語の異なり数はA児940語、B児は2204語である。A児は必要最小限のことばで話す傾向があり、「ザマァミロ」や「チキショウ」など乱暴なことばが多い。これに対しB児の発話では「チコチコチャンチャン」、「カラカラサイダー」などの創作語や「いちおう」、「しょうしょう」などの文章語が見られ、また「それで」、「さて」などの接続詞をもちいて長い発話をする傾向がみられた。

テープからうかがえる言語環境は以下のように異なっていた。A児の家庭ではA児の兄と父の会話、兄のひとり遊びの発話が多いが、A児が話す場面は少ない。A児の友達も兄の友人が多く、乱暴なことばが多いのはこのためかもしれない。また母親の発話は命令や詰問口調が多く、これもA児の発話が少ない一つの原因となっているようだった。一

方B児の家庭には、長女のB児と3歳の弟がいる。B児は長いひとり遊びをしたり、弟と遊んだり、母親と会話をするひとときをもつなど、ゆとりのある生活をしている様子であった。表10-4の会話には両者の言語環境の違いが現れている。

表10-4 会話の質⁶⁾

A児

母：ちがう？ ここへつけるの？

A：どこ やったかなー。

母：いいの？ つけとかなくて？

A：つけとくよー。

母：だからお母さんに貸しなさいって言ったでしょう。

A：うん。

母：お醤油かけないの？

兄：だれ？

母：A子

A：これ。

母：だめよ。ちゃんと食べないと。

B児

<朝>

母：お外見てごらん、お外。

B：みられないよ。

母：なんだと思う？

B：きり。

母：あら、知っているの？

B：いちごうとうとかね とおい ところは あんまり みえない。きりね。

わあー。きりなんて はじめて (アパートに住んでいる)。

B：ね きり なおってきたでしょ。

母：うん 晴れてきたわね。

B：きっと もう どんどんよかった。どうして きのり のときは じどうしゃ
も みんな びしょぬれなの？ ほら あそこ みんな ぬれてる。

母：雨降ったんじゃない？ きのう。

<夕食時>

B：おとうさん きり (キリのキにアクセント) がさ うんと やったって こ
と わかる？きり。

父：きり？

B：うん きょう やったのね。

母：やったとは言わない。霧がかかったの。

父：朝行くとき？

B：ううん わたしが おきた。

母：朝起きた時ね。

B：うん。

父：うん 見えなかったの？

B：うん はちごうとうはね。

父：ふうん。

B：よんごうとうは みえたけど。

父：きり (キリのキにアクセント) って言うんじゃないくて、きり (キリのりにアクセント)。

B：きり。

●豊かな言語環境

大久保は、豊かな言語環境のために、次のようなことを提案をしている。

- 要求や命令語の多い日常生活語のみでなく、自然のこと、心の内部のこと、文化的话题などを話題にする。

- 一語文でなく、整った文で話す。どこで(場所), なにが(対象), どうしたか(述部)を落とさずに、相手によく伝わるようこころがける。以心伝心でなく、論理的に話す。
- 絵本, 童話, 百科事典, 国語辞典, 新聞などに親子で親しみ, 文章語の世界, 内言の世界を豊富にする。

●参考図書

ガーヴェイ, C. 柏木恵子・日笠摩子訳『子どもの会話—「おしゃべり」にみるこころの世界』サイエンス社 (1988)

村田孝次『子どものことばと教育』金子書房 (1983)